聖德大学
言語文化研究所
・
論叢 15

聖德大学言語文化研究所

ISSN-1346-857X

聖徳大学言語文化研究所　論　叢　15

印　刷　平成二十年三月　十五　日
発　行　平成二十年三月二十五日

発行人　川並弘昭

編　集　聖徳大学言語文化研究所
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

発行所　聖徳大学
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

編集協力　（株）エサップ

©聖徳大学言語文化研究所

Printed in Japan

聖德大学
言語文化研究所
■
論叢 15

江苏工业学院图书馆
藏书章

はしがき

聖徳学園が教育の質を高めるために定めた「五誓」の第五条研究の項に「研究のないところには、進歩はない。私達は、常に研究心を旺盛にして自らを陶冶し、もって資質の向上と能率の増進とを図り、学園の発展に寄与しなければならない」とあります。本学園の発展に寄与する研究の第一線を担う部署が、各研究所です。その中でも言語文化研究所は大学発足の翌年の平成三年に設置されて、本年で十五年を迎えるいわば老舗の研究所です。

言語文化研究所がいたずらに年齢を加えた老舗であるわけではないことは、その間、大学の発展に伴い真摯な議論を積み重ねた結果、研究所名称を川並総合研究所から聖徳大学総合研究所に、さらに大学院開設に伴い言語文化研究所と改め、その度に脱皮を繰り返して、確実な成果を積みつつ今日に至ったことが、物語っています。

大学の状況も発足当時に比べますと大きく様変わりしています。研究中心の大学から教育実践重視の大学へ、閉鎖的な象牙の塔から社会に開放された大学へ、それに伴い研究所の在り方も大きく変わってきました。本学に置かれている心理教育相談所、家族問題相談センター、子育て支援社会連携研究センターなどは、その名称からも明らかなように、研究と実践、大学と社会とが密接に結びついている現代型研究施設です。従来、学園内部にのみ顔を向け、閉鎖的な研究中心であった言語文化研究所が、研究発表会・講演会等を市民開放路線に転じたことも、現代型研究所を目指してのことであろうと思われます。

五誓を戴しての各研究所の研究成果が見事に全学の教育にも反映され、本年度は文部科学省の「社会人の学び

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

直しニーズ対応教育推進プログラム」に応募した二件の取組と、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」いわゆる学生支援ＧＰに応募した保育科の一件、合わせて三件が採択されるという好成績を挙げることができました。大学間競争原理に基づく文部科学省の支援はこの二つに留まらず、教育の質を問う「質の高い大学教育推進プログラム」、大学院の取組姿勢を量る「大学院教育改革支援プログラム」等々、挑戦しなければならない多くのプログラムがあります。言語文化研究所の活動も、これらを視野に置きながら開設二十年を目指して展開することと確信しています。

明年度は学園創立七十五周年を迎えます。源氏物語が書かれて一千年に当るそうですが、平成十五年には源氏物語に関する講演会を、本年度は平安女性装束の十二単衣の着付けを公開して好評を博した言語文化研究所が、どのような行事・講演会を企画するか、期待が持てます。

言語文化研究所の研究成果を世に問うべく、『言語文化研究所論叢　15』を刊行致します。いずれの学問分野においても研究が細分化し、ともすると研究の意義や方向を見失いがちな現在、研究所設立趣旨にうたわれている専門の閉塞状況の打開を念頭において執筆された本論叢の各論文が、建学の精神に基づき、研究の本来の在り方を問い、教育に資するものであることを願っています。

御笑覧の上、御叱責、御提言を賜ることが出来れば幸いに存じます。

平成二十年二月吉日

聖徳大学長　川並　弘昭

はしがき……川並　弘昭　3

ユーラシア北方文化の中の日本神話④

落ちた雷の伝承（前編）
——雷丘と加茂別雷神社と遊牧民族と——……山口　博　11

〈ここ〉は〈いま〉に包含されるか（上）
——研究における偶然的発見と必然的思考について——……北村　弘明　89

変容する今——時間の小さな探求……茂木　和行　113

大福長者論……安野　眞幸　171

「かかりうけ交錯の構文」続考
——述語集結型の分析——……碁石　雅利　201

国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」
にみる戦時期文化工作——藤田嗣治を「美術使節」として——……桑原　規子　229

慈円の法流——大原来迎院から醍醐寺まで——……清水　眞澄　263

＊　＊　＊　＊

英文学における「現代性」とは何か？
——トマス・ハーディとヴァージニア・ウルフ……藤井　繁　297

ホジェン族の「イーシン・シャーマン（一新薩満）」……于　暁飛　327

漱石文学研究における〈水の女〉の系譜……李　哲権　353

翻訳学について——改訳・新訳という視点から——……落合　陽子　431

ジョヴァンニ・アンブロージオ・ダ・ペーサロ
『実践の書、あるいは舞踊の技術について』（1463）
Giovanni Ambrosio da Pesaro/De pratica seu arte tripudii,1463. ——その2——
……監訳　川﨑淳之助
翻訳　安広美智子／岸田　眞弓／佐藤　純　461

英語の単純形・進行形・完了形
——その意味をどうやって理解するか——……伊藤　笏康　639

英語音読学の提案——母語から国際英語へ——……島岡　丘　657

＊　＊　＊　＊

ＪＳＬ児童日本語教育研究報告
（平成19年度　聖徳大学言語文化研究所　プロジェクトＢ）……北村　弘明　679

＊　＊　＊　＊

聖徳大学言語文化研究所総覧……709
研究所構成員・研究所経緯
研究連続講演会・研究発表会
研究所講座・プロジェクト

『論叢』総合目次……750

あとがき……山口　博　777

聖徳大学言語文化研究所　論叢

15

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ユーラシア北方文化の中の日本神話④

落ちた雷の伝承（前編）

――雷丘と加茂別雷神社と遊牧民族と――

山口　博

目　次

（前編　本号掲載）
はじめに
一　雷丘の伝承
二　賀茂別雷神社の走馬の儀
三　遊牧民族の雷習俗と別雷神社祭儀
三―一　モンゴル高原遊牧民族高車
三―二　高車族の落雷と走馬と「廻る」
三―三　匈奴の文化を継承する丁零高車
三―四　雷による五穀豊穣・天下豊年
三―五　雷神と隕石と剣とタケミカヅチ
三―六　動物仮装のシャーマン
三―七　幡と刀と矛及び鍛冶師
三―八　シャーマンと火
（後編　次号掲載）
四　別雷神社の外来的要素
四―一　西方オリジナルのカット・グラス
四―二　建国の聖鳥頭八咫烏
四―三　遊牧民族の鳴鏑
五　渡来系氏族秦氏
五―一　別雷神社初期祭司の秦氏
五―二　闘争する狼と秦大津父の伝承
五―三　商業ネットワークの商人秦大津父
五―四　勅勒調・沙陀調と秦氏と楽
五―五　鍛冶技術の伝統
六　秦氏先秦始皇帝末裔説
六―一　秦氏の出自を記さない奈良朝文献

六―二　秦氏を先秦始皇帝末裔とする平安朝文献　　おわりに
六―三　四世紀末大秦皇帝と年号「始皇」

はじめに

東洋史の碩学白鳥庫吉が、モンゴル族やトルコ族等遊牧民族の活動に注意することを怠っている歴史家の多いことを慨嘆し、遊牧民族に対する充分な認識の必要性を説いたのは、昭和十四年に発表した「東西交渉史上より観たる遊牧民族」であった(1)。小説家松本清張が労作『火の路』で、考古学者の口を借りて、日本古代学者の研究態度を、

> 日本のことばかり見ているから、分からないのさ。皆目、無知なことのみ言うようになる。古代の朝鮮、北アジア、東アジアの民族習慣に眼をむけないから、トンチンカンなことばかり書いたり言ったりするようになる。

と痛烈な批判をしたのも、白鳥と同じ視点からであった。

近年遊牧民族の研究は著しい進展をみせ、発表される多くの論に接するに付けても、日本を含めて東アジアの古代文化を開く鍵は、ステップ地帯のモンゴル、トゥバ、ハカス、南シベリア、アルタイ地域、そこを生活の場にしていた遊牧民族にあると確信するのであるが、漢民族の手になる文献との比較が中心である日本古代文学の研究においては、遊牧民族の文化への注目は、全くなされていない。本論の主題に関わる『日本霊異記』のチイサコベノスガルの雷神の話にしても、中国文学あるいは伝承との比較論は幾つかあるが(2)、それらはすべて漢民族の文献か伝承との比較である。

日本文化の形成に最先端技術的ショックを与えた金属器の伝来も馬文化の渡来も、それらはすべて遊牧民族によって西方から運ばれてきたものであった。それらの先進文化の渡来に伴って、彼らの持つ習俗・神話・伝承等が伝播してきたことは疑いない。その視点から考察を試み生み出した成果が、次の拙論であり、本拙論もそれらを踏まえて成り立っている。

『古代文化回廊　日本』（おうふう　二〇〇四年）

「ユーラシア北方文化の中の日本神話①　記紀万葉挽歌考―ユーラシア葬送儀礼『慟哭・務面』から―」（聖徳大学言語文化研究所『論叢12』二〇〇五年）

「ユーラシア北方文化の中の日本神話②　時空を超えてシルクロードを駆け抜けた　死して蘇る若き御子の物語―タンムズ・シャウーシュからアメワカヒコ・ヤマトタケルへ―」（聖徳大学言語文化研究所『論叢13』二〇〇六年）

「ユーラシア北方文化の中の日本神話③　天窓の思想―甍を穿って物を投げ入れるスサノオと神武の神話―」（聖徳大学言語文化研究所『論叢14』二〇〇七年）

『古代文化回廊　日本』の第一編「物・心・人の流れ」及び本『論叢13』掲載アメワカヒコの論「はじめに」は、この一連の思考のベースを示すものである。

ステップ地帯遊牧民族の文化が、日本列島に伝播していたことの仮説ではないことは、『古代文化回廊　日本』において、アキナケス型銅剣、三翼式青銅鏃、樹木状冠立飾り、銅鎮、木槨、刳抜式木棺等のスキタイ系文物の伝来で詳説したが、今回の拙論は遊牧民族の習俗に関るので、習俗に関する一例を示そう。『論叢12』に掲載した「記紀万葉挽歌考―ユーラシア葬送儀礼『慟哭・務面』から―」の一部分であるが。

孝徳朝における大化改新の薄葬礼には、旧俗を廃止する一項がある。

或は亡き人の為に、髪を断り股を刺して誄す。此の如き旧俗、一に皆悉くに断めよ。

（『日本書紀』大化二年三月二十二日条）

「旧俗」とあるから、大化以前からの習俗なのであるが、この「髪を断り股を刺」すという旧俗は、『三国志魏志』倭人伝に書かれている倭人の葬送儀礼には見られず、倭国固有の習俗ではないこと確かである。この習俗こそ、耳や髪を切り、両腕に切り傷を付け、左手を矢で貫くスキタイ民族のものであり、匈奴、フン族、キルギス、突厥、羌胡、吐蕃等の遊牧民族やオアシスシルクロードを生活の場にしていたソグド人、シベリアのオスチャック人、ゴルド人、ベルチル人など広範囲に見られるのであり、中国文献に「西域の胡俗」と書かれ、私が身体毀傷と名付けた葬送儀礼がこれである。その胡俗は漢民族の世界も侵し、その流行に堪り兼ねた唐太宗が禁止令を出したが効果はなく、当の太宗の死に際しても四夷の人たちが身体毀傷の儀礼を行い、「流血地に灑ぐ」(3)という有様であった。

この習俗が倭国時代の後に、日本列島にも流入したので、大化の禁止令になったのである。唐太宗の禁止令は貞観一三年（六三九）、大化の禁止令は七年後の大化二年（六四六）、太宗の出した禁止令の影響である。しかし、日本でも廃止が困難であったことは、天武一五年（六八六）の大津皇子自尽に際して、妃山辺皇女が「髪を被し跣し奔り赴きて殉」(4)じたことが示している。身体毀傷の行き着くところが殉死であった。

また、オオアナムチが出雲より倭国に上る時に、片手は馬の鞍に掛け、片足を鐙に踏み入れて朗々と歌謡を歌う様は、まさに遊牧民族の英雄の見慣れた姿であり、馬の皮を剥ぎ、忌機屋に投げ込むスサノオは、斎場に犠牲馬を捧げる遊牧民の祭主ではないか。

このように神話の中に、またその後の歴史時代においても、遊牧民族の習俗を見るのである。

一　雷丘の伝承

雄略の勅を受けてチイサコベノスガルは、雷を捕らえるために出発した。

緋の縵を額に著、赤き幡桙を擎げて、馬に乗りて、阿倍山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往き、軽諸越の衢に至り、叫嘸び請へて言さく「天に鳴る雷神、天皇請へ呼び奉る」とまうす。然うして此より馬を還して走りて言さく「雷神なりといふとも、何故か天皇の請を聞かざらむや」とまうす。走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴る雷落ちて在り。

（『日本霊異記』上巻「雷を捉る縁　第一」）

このことから、落雷の地を雷丘と呼ぶようになったと言う。スガルの伝承はこの『日本霊異記』以外に『雄略紀』六年三月と七年七月条にも見え、雄略朝の人とされている。『日本霊異記』の作者は、奈良朝末以降の読者の便を考えて、雄略朝には存在しなかった阿倍・山田・豊浦各寺の名を挙げて、スガルの走ったルートを克明に説明する。朝倉宮を出て西に向かい、阿倍寺辺りで南方向に曲がり、山田寺から豊浦寺の前を通って下つ道に至るルートである。現在の桜井市内の阿倍の文殊院の前から広厳寺辺りを通り、橿原市大軽に至る道を「走り往き」「走り還る」というのであるから、往還したのであり、「還」という表記をするが、「還」は「環」に通じ、馬で走り回ったのである。

雷を追って馬で追い駆ける、何の疑問も感じないであろう。しかし、このコースは一直線であり、雷が一直線に往還したというのは、いかにも不自然で、作り事を思わせるではないか。作者がさも見ていたかのように、克明に語れば語るほど、往還コースはフィクションめいてくる。彼の念頭に優先していたことは、馬の往還であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com